

◆生育状況について

1. J A管内 ふじ生育

	発芽	展葉	開花	満開	落花
平年	3 / 28	4 / 9	4 / 23	4 / 26	5 / 1
令和8年					
令和7年	3 / 26	4 / 9	4 / 22	4 / 25	5 / 1
令和6年	4 / 1	4 / 10	4 / 20	4 / 24	4 / 28

◆当面する重点作業について

1. 整枝・せん定が遅れている場合は、早急に進める。また、切り口に必ず塗布剤使用する。
2. 第1回薬剤防除を必ず実施する。
3. 定植苗木の管理を徹底する。
4. 野鼠対策を徹底する。

◆粗皮削りについて

リンゴワタムシ（メンチュウ）・カイガラムシ類・ハダニ類の薬剤防除効果、腐らん病の早期発見のため、第1回薬剤防除までに粗皮削りを行い、薬剤の効果を向上させる。

◆第1回薬剤散布について

1. 散布時期：3月16日(月)～22日(日)頃

実際散布月日	月	日
--------	---	---
2. 使用薬剤（混用順記載）※調合量880当り・10a当り散布量：3500以上

農薬名	使用倍率	調合量	収穫前	病害虫
スプレーオイル	50倍	20	発芽前	アブラムシ類・ハダニ類・ナシマルカイガラムシ
石灰硫黄合剤	10倍	100	発芽前	腐らん病・アブラムシ類・ハダニ類・カイガラムシ類

3. 散布上の留意事項

- 1) 温暖無風を選び実施する。
- 2) 石灰硫黄合剤を散布できない場合は、腐らん病のみ対象となるが、トップジンM水和剤1,000倍（水1000当り100g）を使用してもよい。
- 3) アブラムシ類・ハダニ類・特にナシマルカイガラムシ（最も重要）対策として、春先防除となる。スプレーオイルを必ず散布する。（石灰硫黄合剤との混用でより効果が高まる）樹冠内部、主幹部の上から下まで、しっかりと薬剤を掛ける事が重要。
なお、この防除を実施しない場合は、確実にナシマルカイガラムシは増加する。
- 4) スプレーオイルに代えて、ハーベストオイル50倍を使用してもよい。

◆台木・幹部の亀裂障害対策について

近年、若木で台木・幹部の樹皮亀裂発生が心配される。園地を見回り対策を実施する。

根の活動が始まる3月下旬までに発生が多く、地温の上昇に伴い園地内の水分の多い場所（雪解け水が多い・地下水位が高い）で発生しやすい。

対策として、亀裂が発生したら、部位を乾燥防止のためにトップジンMペーストを塗布する。亀裂が大きい場合は荒縄や緑化テープ（麻布）などで縛ってから塗布する。

◆高密植栽培（新わい化）講習会開催について

期日	曜	時間	開催場所	担当
3月25日	水	午前10:00	篠ノ井会 あいアップル様園	根津・寺澤

◆高密植（新わい化）管理について

1. 深植えにより樹勢が強すぎる場合は、掘り上げを行いM9台木の地上部を確保する。
2. 水はけの悪いところは、園の周囲などに溝を掘り排水を良くさせる。
また苗を掘り上げて盛り土する。雪解け水の排水は良いか確認。
水を吸って凍害になるか、水が溜まって根腐れになりやすいので注意。
3. 誘引作業を行いフェザーは水平以下にする。
暖かい時期になってからのほうが誘引しやすいが、作業が間に合わない場合は早めに行う。
4. 強樹勢樹のせん定は、4月に実施すると樹勢が落ち着きやすい。実施方法は、せん定講習会にて
5. 苗の植え付けについて
 - 1) 苗木は、乾燥させないように管理し、できるだけ早く定植する。
 - 2) 地温が十分に温かくなった時期に定植する。目安は、地下20cm以下で温度が8℃以上となる3月下旬から4月中旬頃。ただし、発芽前には実施したい。
 - 3) 定植前に、①生育が優れ不発芽回避②乾燥ストレス・根周辺の土壤水分障害回避③春季の脱水軽減のため、苗木を30～40cmの水の中に24～48時間浸け、給水させる。
 - 4) 定植時に苗木（根）が乾燥しないように注意する。
 - 5) 定植時に、深植えを避けて10cm程度の盛り土を行う。5～10cm程度沈むので注意する。
元水田や排水の悪い園は、更に盛り土を行う（フェザー苗は湿害に弱いいため）
土質や周囲の状況で植える高さは異なる。排水を重視する。
 - 6) 地上に出るM9の台木の長さが樹勢に影響する。長い＝弱くなる、短い＝強くなる。
ふじは20cm、その他の品種は20cm以下を目安とする。
こぶの位置で高さを揃えて植え付けると、樹勢が揃いやすい。
 - 7) 定植時に支柱へ固定する。
 - 8) 定植後、土壤水分に応じて十分なかん水を行い土となじませる。
1本当たり最低8ℓ、10a当たり300本植えなら2400ℓ必要
 - 9) 定植後は、土壤水分に注意し、根域に水が届くよう十分なかん水を週2回以上実施する。
目安は、4～5ℓ/樹当り。特に発芽後の定期的なかん水が重要。
ワラを敷く場合、束のまま使用し1本当たり6束程度必要（保水・除草効果）
6. 苗木でフェザー（副梢）の発生が少ない苗の管理
 - 1) フェザー（副梢）の促進を図る。詳しくは果樹営農技術員まで。

7. 施肥

施肥時期	肥料名	施肥量 (10 a 当)
3月下旬から4月	有機専科	2袋
	果樹の力	2袋

1) 留意事項

- ①有機専科に代えてグリーン長野果樹専用有機入り72を1袋でもよい。
ただし、この場合は3月上旬が本来の施肥時期のため早急に施肥する。
- ②主幹伸長の状況や土壌診断結果を参考に樹勢に応じた施肥を行う。
近年樹勢の低下や品質低下が多い傾向。基本となる栽培管理（誘引・摘花・摘果・着果量・葉摘み・収穫など）を正しく行い目標収量の5～6トン/10a当を目指す。

◆腐らん病対策について（重要）

腐らん病の発生が目立っています。地域的に蔓延すると大きな被害になることが予想される。一丸となって対策を徹底し、腐らん病の増加を防ぐ。

1. 腐らん病とは

カビ（糸状菌）による病気です。特徴は以下の2つ。

1) 主な感染部位は傷口

自然条件で起きる凍害や風による枝折れのほか、管理作業で発生する摘果や収穫時の果台痕、せん定痕など。

2) 伝搬を担う胞子は一年中飛散

傷ができるせん定後、摘果後、収穫後が主な感

染時期＝「重点的な対策が必要な時期」

2. なぜ、今増えているのか

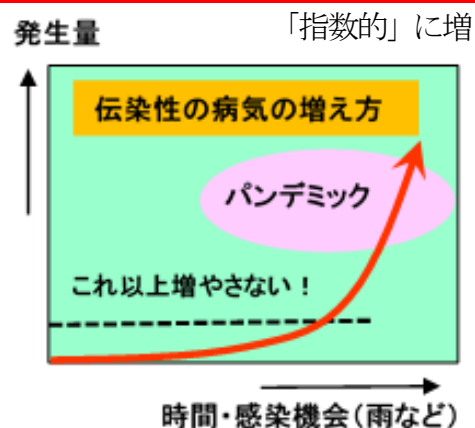
以下の点が増加に影響している可能性あり。

- 1) 病勢進展が早く、重篤化しやすい「わい化栽培」の増加。
- 2) せん定時期が早まっている。
- 3) 「ふじ」は摘果後の果台が脱落しにくく、枝腐らんに進展しやすい。
- 4) りんご生産の大規模化や高齢化が進み、対策が徹底できない。

伝染性の病気なので、何らかのきっかけで増加傾向になると、多くの伝染源が生み出され、さらに多くの発生を引き起す。病気は「直線的」ではなく

増加を実感できる状態は大きな波が押し寄せているとき。

新型コロナウイルスで経験したように、対策を強化しないと波は次々と大きくなり、被害も大きくなる。



3. 対策：伝染源の除去

1) 枝腐らんのせん除

枝腐らんは見つけ次第せん除！！。

展葉～開花ころから見つけやすくなります。摘果時にハサミやノコギリを持たない場合は、ビニールひもを持って、しるしをつけましょう。

病原菌は枝の表面よりも内部に広く存在するので、健全な枝や葉そうを複数含めて長めにせん除してください。

2) 胴腐らんの処置

病斑が主幹外周の半分以上に進展している場合は伐採を検討してください。

①削り取る病斑の下にシートを敷き、削り取った病斑を回収できるようにする。

②病斑の周辺を軽く削り、病斑の大きさを確認する（この部分に病原菌が存在）。病斑は表面よりも内部の方が広い範囲に及んでいる。

③削り取りは専用の腐らんナイフ（腐らん削り）がおすすめ。

・削り取る輪郭に破線状に腐らんナイフを垂直に挿し、紡錘形にしるしをつける。

・しるしを線状につなげると、内側の病斑部を剥がし取ることがきる。

4. ポイント：伝染源除去にあたって

1) 園内の点検

①樹体に傷を作る摘果作業の前には、園内の点検を行う。

②展葉～開花期は、腐らん病が目立ち始める時期のため、摘果前は一斉点検を実施する。

③地域まとめって実施すると効果的。

2) せん除した枝、削り取った罹病部の処置【重要】

①絶対に園内に放置しないでください。雨にあたるなど、水分があると孢子を形成して飛散させる。

焼却するか土中に埋める。なお、法に基づきやむを得ず焼却を行う場合は、苦情が出ないように周辺環境に十分配慮する。すぐ処分できない場合は、シートをかけて雨が当たらないようにする。

**腐らん病に特效薬はありません。地域一丸となった「伝染源の除去」が重要です。
潜伏期間が長いいため、対策の効果を実感できるのは2～3年後です。
地域のりんごを守るため、根気強い「腐らん病対策」を実施する。**

(引用：長野農業農村支援センター～りんご生産者の皆様へ～)

これ以上被害を増やさないために、有効な防除対策の一つである「樹皮の削り取り」動画が作成されています。この動画を参考にいただき、りんご腐らん病の発生軽減・撲滅を目指しましょう。

<https://www.youtube.com/watch?v=9LLtcCQ3Tvc>

または、YouTubeチャンネル「長野農業農村支援センター」を検索ください。